

昭和五十一年度

秋季公開講演会要旨

信心の行人

本学教授 廣瀬 泉

親鸞によって領受し開顯された仏教、すなわち、浄土真実教行証（浄土真宗）において、その中核点を押えるならば「信」の一字に凝集される。おそらく、このことにさして異論はないことであろう。しかも、その「信」の確證が、法然により独立せしめられた他力本願念仏宗（浄土宗）に帰することに於いてなされたことも周知のごとくである。また、浄土宗が他力本願念仏宗として、その内実の明確化された仏道であるかぎり、浄土宗の独立は、明らかに聖道という在り方において伝統される仏教との訣別のもとに成立つという質のものである。この一点をいかに私的關心を超えて明らかにするか、そこに、浄土宗独立の歴史的意義を闡明にする基点がある。親鸞は、まさしくその基点を「信」の課題において明瞭にしようとしたのである。しかし、このような意味における「信」は、聖道の仏教との訣別のもとに明らかにされねばならない。たとえば、教・信・行・証という次第をもって了解される聖道の仏教の実践、ならびに教理における「信」と、親鸞が浄土真実教行証を開顯しようとする教学の書である『顕浄土

真実教行証文類』において、教・行・信・証と次第するなかで明らかにされる「信」とは、その基本的確證点を異にするものである。そしてこのことは、今日においては、さらにひろく宗教という言葉を以て統括される事柄における「信仰」の概念とも同一というわけにはいかない。とするならば、法然により独立せしめられた他力本願念仏宗（浄土宗）の、したがって、その一宗独立の意義を闡明にすべく親鸞によってなされた顕浄土真実教行証において、その中核点として明らかにされる「信」とは、聖道の仏教における「信」とどのような選びをもち、また、統括的な意味で了解されているであろう宗教という事柄における「信仰」ということと、いかなる異りをもつものなのであろうか。このことは、近時、私がことに関心を寄せ注目している事柄のひとつである。

しかし、私の関心の寄せ方は、かならずしも、いわゆる教理的と呼ばれるかたちのものではなく、むしろ、歴史における現実的事柄として、このことに注目せざるをえない、という方向をもっている。端的にいって、親鸞が法然の教えに遇い、遇うことを基点として六十余年の生涯を生き尽すうえにおいて、確認したであろう「獲信」ということは、人間存在における事実として、具体的にいかなるはたらきをなすものであったのか。獲信により人間はどうなるのか。このことが、私の問わずにはおれない事柄なのである。

以上のような着目のもとで、はからずも気付かしめられたことではあるが、親鸞の全著述の中において、「信者」という用語例

がきわめて少いということである。まずその主著である。『顯淨土真實教行証文類』の中には全く見出されない。その他の著述の中にも五カ所においてしか見ることができない。その五カ所とは『正像末和讃』に二カ所、『尊号真像銘文』のなかに二カ所、そして、『弥陀如来名号徳』のなかの一カ所である。その一々を詳細に検当することは省略するが、少くともそれを通して窺い知られることは、「自力の行者」「化土の行者」等というような選びの対象を明確にする場合に用いられるか、『尊号真像銘文』のように広本・略本があり、それにより「信者」は「信ずるひと」と言い換えられていくというように、何かを確認するために必要な場合か、或いは一度使用しても、その内実を明らかにするためにために言い換えられる、といったような場合に用いられていて、「信者」という言葉が直爾に使用されるということは、むしろ驚くほどに稀有であるということである。親鸞の数多くの著述のなかで、しかも既述のように中核点を「信」という事柄においているにもかかわらず、「信者」という用語例が殆ど無に等しいということは、はたしてまったくの偶然事として看過すべきであらうか。少くとも私には、そのように考えることはできない。「信者」という言葉にかわる用語例、すなわち、「信ずるひと」「信をえたるひと」「本願の行者」「念仏の行者」「信心の行者」「信心の行人」等を見て思い当る事柄は、「行」ということと「人」ということである。そしてこのことが、親鸞が明らかにしようとする「獲信」ということの内実を知ろうと、決定的な手掛りとなるのではなからうかと思わずにはいられない。そのようなことを、きわめて

明瞭に示しているものとして、

真實信心の行人は、撰取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし、來迎たのむことなし。信心のさだまるとき往生またさだまらなり

という『末燈鈔』の言葉を見ることができよう。すなわち「獲信」とは、阿弥陀―絶対無限―の実動態（撰取不捨）のうちに、成仏を必定とする存在として現在を能動的に生きる人間となることである、ということである。このことの内容を明確にするために、敢て言うならば、人間が信心という内在化されるある特殊な心理を得るのではなく、信を獲るという出来事のみならず、はじめて、人間を獲るのであり、自己を獲るのである。人間が信をうるのではなく、信により人間をうるのである。したがって「獲信」ということがないならば、われわれは、人間である自己に遇うことなく、生涯を空過せざるを得ない。そしてこのことは、人間における諸属性によるえらびにかかわりなく、文字通り平等のことと言わねばならない。換言すれば、人間における生きる事の根源的な受動性を変革して、いつ、いかなる在り方で生きようとも、いのちの能動性に目覚めて生きる存在となることである。そのことは、

常没凡愚流転群生無上妙果不難成真實信樂實難獲何以故乃由如來加威力故博因大悲広慧力故遇獲淨信者是心不顛倒是心不虛偽是以極惡深重衆生得三大慶喜心獲諸聖尊重愛也（『教行信証』・信卷）

という言葉のうえにも、充分に窺い知られることであらう。

しかも「獲信」という事柄を、このような内実の明確化のもとに示さねばならなかったことも、また親鸞における個人的な問題として見過すことはできないように思われる。すなわち、親鸞における「獲信」の明確化は、いわゆる承元の法難を契機とし、越後への流刑に出発点をもって、そこからはいま「田舎のひとびと」との具体的な生き合いを内容としつつなされていったことであるに違いない。したがって「獲信」とは「獲人」であるという事は、一点の観念性も加えられることのない、人間における現実の事柄として、証明されつつけていくことであつたのである。私の関心は、この点に注がれているのであり、それゆえに、この点の確かめを徹底することによって、親鸞における「信」の具体的性格を明らかにしていかねばならない、と考えている。と同時に、いつの頃よりか「信者」という呼称が一般化して定着しつつ今日に至っているという事実のなかに、まったく問題はなにか否かを、矢張り問わないわけにはいかないことと思う。

親鸞における「信」の課題には、少くとも上述のごとき事柄の確認ということが、きわめて大切な問題としてあるといわねばならないであらう。

ソクラテスの自然学批判

本学助教授 箕浦恵了

「魂の不死」を闡明せんとするプラトンの著作『パイドン』篇において、ソクラテスは、かれが若かった頃自然の研究に熱中し、やがてついにこの研究を断念するに至った自己の体験を語っている。何故ソクラテスは当篇においてこの体験を語ったのであろうか。また当時の自然学に対するソクラテスの批判はいかなる意味のものであつたであらうか。

当篇においてソクラテスと対話しているシミアスとケベスの二人は、共にかつてピタゴラス学派の自然学者ピロラオスと交わり、かれの学説を聴いた人々であつた。しかしながらシミアスとケベスの両者は、共にもはやピタゴラス学派の宗教的伝承の内には居らず、却つてかれらは、当時の自然学的啓蒙に基づいて広がりつつあつた不信（魂の不死についての）に侵され、その不信を代表する者として、ここに登場しているのであると思われる。この両者をソクラテスに対置することによって、プラトンは「魂の不死」を闡明するための周到な対話的狀況を設定したのであると思われる。不信の依つて立つ根拠たる自然学をソクラテスが批判し論駁することによって、シミアスもケベスも不信の理論的根拠を失うのである。かかる自然学批判によって、当時の学的啓蒙に